

『室津は古代から近世末まで、瀬戸内の要津であった。

賀茂明神はこの室津の突き出た半島岬の小高い丘上に鎮座するが、その草創は明らかでない。文献上では中世には社殿が建ち並ぶ様が描かれる。また、古くから山城賀茂別雷社（上賀茂社）の御厨（社領）であったと記録される。

中世後期から社殿造営・造替の資料が残るが、その内多宝塔に関しては「慶長3年（1598）多宝塔婆飛驒守建立」と云う。但し飛驒守とは不詳。

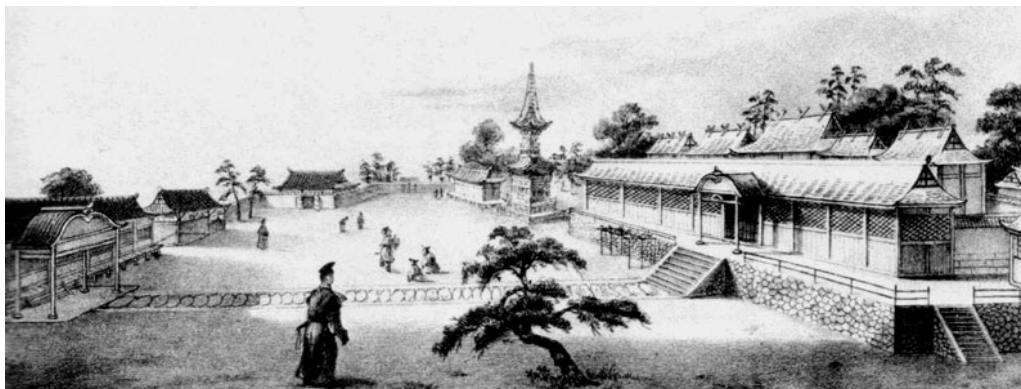
近世には徳川家より30石の朱印を受ける。また姫路藩主より室津は内海の重要港として管治され、賀茂明神も姫路藩主により造替や修理が行われる。現在の主要社殿は元禄12年前後の造替になるものである』

七棟の重要文化財というのは、五社造りの社殿（本殿、権殿、3棟の摂社）唐門、及び社殿を取り囲む回廊。本殿は三間社流造り、高床、桧皮葺で、他の社殿も同様の流れ造り。室津の賀茂神社は本殿と拝殿が境内を隔てて建っているのが特色である。

記事中の多宝塔は、明治の廃仏棄釈で取り壊され今はないが基壇は残っている。幕末にこの地を訪れたシーボルトが、その著「日本」の中で、「建築上の真の名作」と讃えている。（図は日本の中の挿絵で本殿の前に多宝塔が見える）

表門は四脚門といい龍の彫刻で有名。両側の上段にある龍は足の部分が馬のひづめなので「馬足の龍」と呼ばれている。

冒頭の紹介文は、文化財建造物保存技術協会が発行している「賀茂神社本殿他七棟（重文）保存修理工事報告書（1981年）」の引用で、インターネットの孫引きだが、実に簡潔で古文の書留のようで引用した次第です。



賀茂神社由緒書には以下のように紹介されている。

『今から約2660年以上前、^{かみやまとい は れびこのみこと}神倭伊波礼毘古命が御東征の途中、備前の高島宮に8年間お留まりになっていたとき、御先導を勤めた^{か も たけつのみのみこと やたがらす}賀茂建角身命（八咫鳥）が室津の入江に港を造られ、一人の翁と人々を残していかれた。これが室津の港の始めである。以後、室津は瀬戸内海屈指の良港として、その名は奈良、平安の都にも聞こえ、遣唐使出発の港の候補にも選ばれたことがあった。

平安時代になると、室津は室塩屋御厨として京都賀茂別雷神社社領42所の一つとなり、治承年間には平清盛が高倉上皇と厳島詣の途中、室津に一泊し神前に御幣を奉げ海上安全と旅の安泰を祈られたとき、「社大やかに五・六並び」と記されていることから、今から八百年以上前には、現在と同じたたずまいで神様をお祀りしていたことがわかる。』

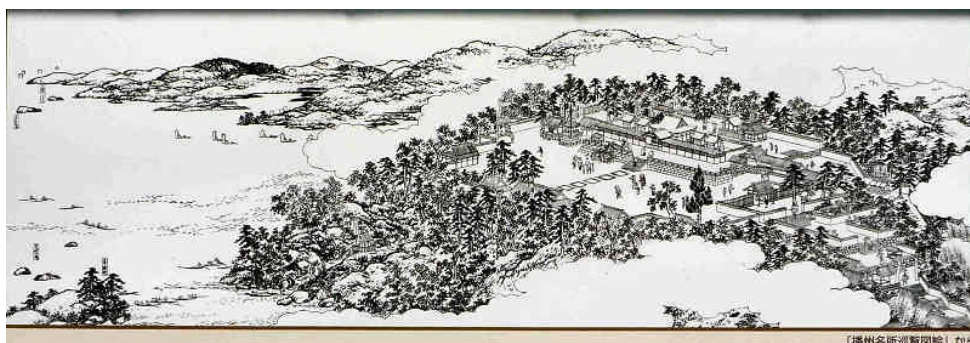
このあと、源頼朝、足利尊氏、徳川家康などの時の権力者の尊崇を受け、シーボルトや頼山陽、竹久夢二、谷崎潤一郎などが訪れたことが記されている。

^{か も たけつのみのみこと}賀茂建角身命は京都の上賀茂、^{かものあがたぬし}下賀茂社の主祭神で賀茂県主の祖で、賀茂神社が京都の上賀茂神社の荘園になった時、分社として同祖神が勧請されたのである。

京都の上下賀茂社は、朝廷の尊崇と保護を受けて既に奈良時代から各地に社領を築いているが、諸国に御厨が分地されるのは1090年に上下賀茂社に新税不足を補うために土地が寄進されて以後のこと。室津の賀茂神社が建設されるのもそれ以後で、平清盛が高倉上皇を伴って訪れたのは1180年だから、「社大やかに」と記される彼らが見た社殿は、まだ真新しかったはずである。

由緒書には神武東征伝承が見えるが、この地が古代の海の道である瀬戸内の重要な場所であったことは間違いがない。

現在の室津の漁港では、かつての繁栄を想像する事は困難だが、室津の町と海を見下ろす台上に建設されたこの神社は当時の姿のまま残されている。それは平清盛が見た姿であり、シーボルトが見た姿であり、そして海の宿場町、室津の栄華を今に伝えている姿である。



「播州名所巡覧図説」から

「播州名所巡覧図説 - 室津・賀茂神社」